

①私の基準としては、本を読んだというのは、まず「要約が言える」ということだ。全体の半分しか読んでいなくとも、その本の主旨をつかまえることは十分にできる。

P 1 8 L 7

②なぜ百冊なのか 読書力があることの基準を文庫系百冊新書系五十冊を読んだことにおいたが、なぜ文庫系百冊なのか。それは、読書が「技」として質的な変化を起こすのが、およそ百冊単位だからだ。

P 2 6 L 1

③日本には聖書のような唯一絶対の本、すなわち the Book of Books がないから、たくさんの本を読む必要があった、という話が出てきた。これは、おもしろい観点だ。

P 4 6 L 9

④矛盾しあう複雑なものを心の中に共存させること。読書で培われるのは、この複雑さの共存だ。自己が一枚岩ならば壊れやすい。しかし、複雑さを共存させながら、徐々にらせん状にレベルアップしていく。それは、強靱な自己となる。思考停止するから強いのではない。それは堅くもろい自己のあり方だ。思考停止せず、他者をどんどん受け入れていく柔らかさ。これが読書で培われる強靱な自己のあり方だ。

P 5 2 L 4

⑤本のおもしろさは、一人の著者がまとまった考えを述べているにもかかわらず、言葉がその著者の身体からは一度切り離されているところにある。たとえば、吉田兼好の『徒然草』を読む。兼好の身体はとうにこの世にはない。しかし、言葉は残っている。兼好の見事な論理と表現は、何百年の時を超えて、感情のひだをも伝えるようにこちらの胸に迫ってくる。外国の著者の場合は、いっそうの感が強い。私はゲーテが好きで、ゲーテを自分のおじさんのようにも感じている。しかし、ゲーテと私とは時も場所も離れた関係にある。こちらから積極的に本を読まなければ、向こうからは来てはくれない。訪ねて行って話を聴く。そうしたゲーテの家の「門を叩く」という構えがなければ、出会いが起きない。時と場所が離れた人間と出会うということは、ふだんのコミュニケーションとは違う楽しい緊張感を味わわせてくれる。

P 6 2 L 1

⑥暗黙知という言葉がある。自分ではなかなか意識化できないが、意識下や身体ではわか

っているという種類の知だ。言語化しにくいけれども何となくからだでわかっているような事柄は、私たちの生活には数多い。むしろ、そうした暗黙知や身体知が、氷山でいうと水面の下に巨大にあり、その氷山の一角が明確に言語化されて表面に出ている、という方がリアリティに即しているだろう。本を読むことで、この暗黙知や身体知の世界が、はっきりと浮かび上がってくる。自分では言葉にして表現しにくかった事柄が、優れた著者の言葉によってはっきりと言語化される。こうした文章を読むと共感を覚え、線を引きたくなる。

P 8 5 L 5

⑦子どもを育てる身になってみると、現在の子育てにおいて倫理観を子どもに持たせることは、意外に難しい。絶対的な宗教を持たないことが、その大きな要因だ。宗教の代わりになるものが読書だと先に述べたが、伝記はその中でも重要な役割を果たしていたと考える。

P 1 0 1 L 4

⑧自己形成は、進みつつも、ためらうことをプロセスとして含んでいるはずだ。人間は努力する限り迷うものだと言ったのは、ゲーテだ。一冊の絶対的な本をつくってしまうのならば、それは宗教だ。冷静な客観的要約力をもって、いろいろな主張の本を読むことによって、世界観は練られていく。もちろん青年期には、何かに傾倒するということがあっても自然ではある。しかし、その傾倒が一つに限定されるのではなく、傾倒すればするほど外の世界に幅広く開かれていくというようであってほしい。一つの本を読めば済むというのではなく、その本を読むと次々にいろいろな本が読みたくなる。そうした読書のスタイルが、自己をつくる読書には適している。

P 1 0 4 L 4

⑨私が「読書はスポーツだ」と言うのは、読書にはスポーツと同じような上達のプロセスがあり、読書もまた身体的行為であるという意味だ。それとともに、一度読書をスポーツとして捉えると、今まで読書を敬遠していた者にとって、読書が近づきやすく感じられるという狙いもある。

P 1 1 0 L 1 0

⑩私自身が子どもに読み聞かせをした経験の中で、お薦めしたいと思う絵本は、『ギルガメシュ王ものかたり』『ギルガメシュ王のたたかい』『ギルガメシュ王さいごの旅』（岩波書店）の三部作だ。これは、メソポタミアの世界最古の神話の一つ、ギルガメシュ王の物語を絵本にしたものだ。楔形文字で粘土板に記されたギルガメシュの物語は、ノアの方舟の原型とも言える話を含み込んだ壮大なものである。神話を構成する重要な要素に満ちている。友情と恋愛、英雄物語、生と死の物語、悪との戦い、旅など、物語の原型

がほとんどと言っていいほど入っている。絵も素晴らしく、一枚一枚が壁画のようだ。色使いも美しい。ただ単にうまいというのではなく、神話の重みが伝わってくる荘厳さがある。一方で、疲れたライオンを背負って歩く絵柄など、ところどころユーモアも感じられる。原文の物語化もうまく、無駄がない上に、抽象的になりすぎていない。訳文も、文語体の迫力をところどころに生かしていて、申し分ない。とりわけ凄いのは、第三巻の『ギルガメシュ王さいごの旅』だ。人生の問題が凝縮されていて、大人でも十分味わうことができる名作となっている。

P 1 1 5 L 1 4

⑪声に出して読むと脳は活性化しやすい。これについては、「脳科学と教育」を研究テーマとする川島隆太東北大教授を中心としたグループの研究成果がある（「産経新聞」二〇〇二年六月一七日付の記事を参照）。いろいろな動作行動ごとの脳活動の状態が画像処理されていて、活性化している部分が、一目でわかるようになっている。たとえば、「音楽を聴く」場合には、側頭葉の一部の聴覚領域のみが活性化しているだけだ。コンピュータゲームでは、脳の後ろの部分が中心的に活性化する。ただ「目を閉じたまま明日の予定を一生懸命考えているとき」などは、ほとんど活性化していない。足し算を一生懸命速く行くと、脳の広い範囲が活発に動き出す。漢字を覚える場合には、ただ読むだけではなく書きながら覚える方が活性化度が高い。読む場合には黙読よりも音読の方が脳の活性化領域は広がる。比較すると、これらの中では、音読したときが、一番活性化領域は広がっている。

P 1 2 6 L 1 2

⑫実際に線を引くときには、勇気がいる。自分自身の価値観や判断がそこに表れ、印として残ってしまうからだ。他の人に、もしかしたら見られてしまうかもしれないという恥ずかしさも含まれている。的外れなところに引いてしまえばみっともない、という気持ち乗り越えて、線を勇気を持って引く。この一回一回の積み重ねが、本を読む力を鍛える。

P 1 3 5 L 7